

■■■ 早川孝太郎を読もう ■■■

= 民俗学の楽しさいっぱい =

早川孝太郎研究会世話人 大谷将夫

早川孝太郎という人

早川孝太郎のことを思うと胸が熱くなる。明治二十二年十二月二十日、長篠村大字横山（現新城市横川）で早川要作氏長男として生まれた。「三州横山話」「猪・鹿・狸」「花祭」といった著作を残し、昭和三十一年に病没された。私の父は明治三十五年生まれだから、父より少し以前の人と思っている。五十年も以前にこの世を去った早川孝太郎。孝太郎の書いた世界は百年も昔のことと思えばよい。



私たちは今真剣に彼の本を読もうとしている。まず二十名で研究する会を作り平成十六年十一月一日に第一回の会合をもった。

すでにその芽はあった。長篠医王寺に顕彰碑はたち平成十四年十一月に横川公民館で早川孝太郎を研究しようという話があり、若い頃、早川氏の講演をきいた人から話もきいた。

そして昨年も研究会をもち、孝太郎に関するゆかりの地の映像をみることができ実に盛会であった。

機は熟し、第一回の会合で毎月一回、第一月曜日に横川公民館で読書会を開くことになり、まず手はじめに「三州横山話」「猪・鹿・狸」を読むことになった。

「三州横山話」

これが早川孝太郎の出発であり原点である。その文章は平明でおもしろい。中でも「種々な人の話」は最高である。水潜りの名人、五十里を一日で歩く人、死ぬまで縄をなつた人など面白くてかなしい人が登場する。芥川龍之介がほめたすぐれた文章に出会う。

水潜りの名人

ショウビンと呼ぶ爺さんは水潜りの名人で、村で溺死人の死体が見つからぬときは、最後はかならずこの爺さんが頼まれました。潜って行って三十分ぐらいは浮かんで来なかったそうです。その間に川底で二呼吸すると言いました。

どこのものともわからず村に近く、どこかしらに遊んでいたものだそうですが、三、四年前、村に身投げ女があってその死体が知れなかった時、村のものがだんだん尋ねて岡崎まで行って聞くと、一〇年ほども前に死んでしまったと言うことでした。

一日五十里歩く男

長篠村字内金の久保屋という家は今もあります、この家の先代の主人は、体格も特に

勝っていたそうで道を歩くことがことに早く商用で、長篠から名古屋へ二十五里の道を、一日に往復したといひます。その当時を記憶している者の話に三度笠を胸に当て、その笠が下に落ちないぐらいの早さに歩いたといひます。

死ぬまで縄をなつた男

私の祖父の弟で、遠江の堀の内（藤枝方面）夏目周吉という男は五年前に亡くなりましたが、若い頃から律義者で大変儉約家であつたそうです。（中略）

この男が年を老って、死期が近づいた二、三年はボケてしまつて、朝起きるとその日の天候を家のものにきいて、三州へ墓参りに行かなくてはならないと一人うべな諾うべなつては土間へ降りて草鞋を作るのが日課であつたそうですが、草鞋に緒を付けることを忘れてしまつて、二尺ほどもある長い草鞋を幾つも作つたといひました。

いよいよ臨終という日には、床の中でその日の天候をきいて、手に唾をつけては、しきりに縄をなう真似をしていて、息を引き取るまで、その手つきは休めないで、安らかに息を引き取つたといひます。

これからの民俗学

いずれの話も面白い人が登場し、内容も表現もおもしろい。民俗学というよりすぐれた短編小説だ。

私たちは「横山話」の次に「猪・鹿・狸」を読む。いずれも市内の「はぐるまの会・音訳部会」の人々の労作テープをお借りしての学習会である。

この二作を読んだあと、また読みながら、更に部厚い著作に挑戦し現地を歩いてみたい。そして大切なことは早川孝太郎氏の著作から民俗学の本質を学び、力をつけて、自らのふるさとの民俗を記録していきたい。

今や昭和のはじめも昔である。昭和十年代、二十年代、そして戦時中を記録したい。戦後のくらしを記録にとどめたい。民俗学とは読むことばかりでなく書くことなのだ。